

●伊東マンショ生誕地

都於郡城跡は西都市都於郡に位置し、中世山城としては規模も大きく、自然の地形を巧みに利用した跡がよく残っている。二〇〇〇(平成十二)年、国の史跡に指定された。現在、史跡公園として整備され、遊歩道をはじめ駐車場や休憩所、トイレなどの設備も整い、日向中世の歴史への回想を誘う観光スポットになっている。

鎌倉時代に源頼朝に仕えた武将・工藤祐経の五代目の子孫・伊東祐持は、南北朝争乱初期の建武二(一三三五)年、足利尊氏に忠勤を励んだ功により、都於郡三百町をあてがわれ、伊豆国から一族郎党を率いて下向してきた。日向の戦国大名となる伊東氏の始まりである。

祐持の跡を継いだ祐重は、都於郡の堡塁(ほうるい)を大がかりに改築、壮大な山城に造りあげた。以後十六世紀半ば過ぎまで、伊東氏全盛の時期の城であった。

都於郡城について忘れることのできないのは、天正十五(一五八二)年の少年遣欧使節として知られている伊東マンショが、ここで生誕していることである。

西都市では一九九六(平成八)年、都於郡城跡整備事業竣(しゅん)工記念事業として、平成遣欧使節団の海外派遣を実施した。天正の少年使節に関係する長崎県大村市、千々岩町など五市町から中学生二人ずつ、計十人を選び、イタリヤまで旅をして、ローマ法王に会うという企画である。

同年と〇一(同十三)年に派遣。昨年は遣欧使節ゆかりの地交流事業で長崎県の西海町「西彼(せいひ)青年の家」で二泊三日の交流会を行った。五百年以上も昔の故事にちなんで、現代の少年たちに天正少年使節の志を学ばせるのが狙いである。

都於郡城は「曲輪(くるわ)」と呼ばれる土や石で区画された防御の囲いがいくつも造られている。中心部に本丸、それに続く二の丸、物見やぐらのあった三の丸、西の丸、伊東氏一族の館があった奥ノ城などが一大城郭を形成していたと思われる。曲輪と曲輪の間には、深い空堀が設けられていた。

発掘調査だと本丸と二の丸の間にある空堀はV字堀で、地下に約四メートルも掘り込まれている。上部の土塁の高さを加えると約六メートルの防壁となり、堅固さがしのばれる。

西都市は西都原古墳群をはじめ多くの文化財が現存している。その中でも都於郡城跡は興味深い物語性に富んだ歴史ゾーンとなっている。

日高正晴



都於郡城跡。史跡公園として日向中世時代にいざなう